

「みせの間」は日本的商いの間

商品と情報がやりとりされる空間

世の中モノであふれてる近頃。経済の活性化には大いに結構なことかもしれないけど、タオルやナベなど、何年分も家に眠っている。盆、暮れの贈り物やお返しなどで置場に困るほど。

これじゃ、せっかく生み出されたモノたちがかわいそう。確かに、不況から脱出するには、モノが売れないと困るけど、モノの売りに買いにこだわりや愛着が希薄になってしまっている感じがしませんか。

北国街道などの通りに面して、格子やそで壁を持った町屋が並んでいます。今では、ノスタルジックな風景として、町並みを楽しむ観光客が多いのですが、昔はロードサイド・ビジネスの中心地として栄えたところですよ。

特に、長浜や木之本、米原などには、北国街道が通り、古くから城下町や門前町、宿場町として発展したところから、商店や手工業の店が軒をつらね、旅人や周辺の村々の人が

買い物に集まってきました。商品を売った、お客と店主の会話のやりとり。自分の店の品物には、絶対の自信と誇りを持って、お客のニーズに合ったモノを出し、信用という人間的な関係で結ばれていたよき時代。そんなものを、現代の私たちはどこかに置き忘れてきたような気がします。

町屋は商店街の始まり

町屋と呼ばれる建物は、通りに面した間口が狭く、奥に長く伸びた、短冊型の敷地に建てています。表通りに面したところに「みせの間」があって、ここで商品を並べたり、取引を行っていました。町屋の様式は、京都などで発達し、全国へ伝わっていったものなのですが、ことに、通りと並行に二階のヒサシが低く出る、平入りの建て方や、みせの間と通りを区切る格子戸、はね上げ式の床凡のよきな揚げ見世などの表構えが特徴的です。



みせの間は、もともと、家の表に商品を並べる棚を設けて、売り買いをしていたものが、部屋に変化していったようです。また、格子は防犯を目的とした太くて頑丈なものでしたが、次第に装飾化し、取り外し可能な格子戸をはめた簡単なものになっていきます。

屋間は格子戸を取り払い、通りからひとめで室内が見渡せます。取り扱っている商品がとりどりに並べられ、行き交う人の目を引く様子は、現代のショー・ウィンドウにも匹敵するものだったのではないのでしょうか。

見直されるみせの間空間

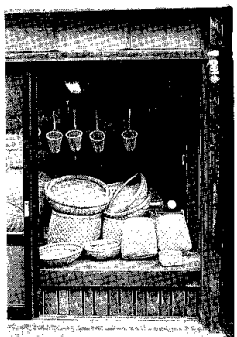
人が集まることには、情報が集まります。みせの間を持った町屋では、商品と一緒に、情報のやりとりが自然に行われていました。

今でこそ、どこにいても、どんな情報でも入ってきますが、昔は旅人がいろんな情報や珍しい品物などを運んできました。みせの間は、そういう有形無形の「魅せもの」が並ぶ、いわば時代の最先端の空間でした。

また、自家製作の品を扱う店では、商品の販売から使用法、修理にいたるまで、一貫したノウハウ

が蓄積され、安心して買

い求められたのです。



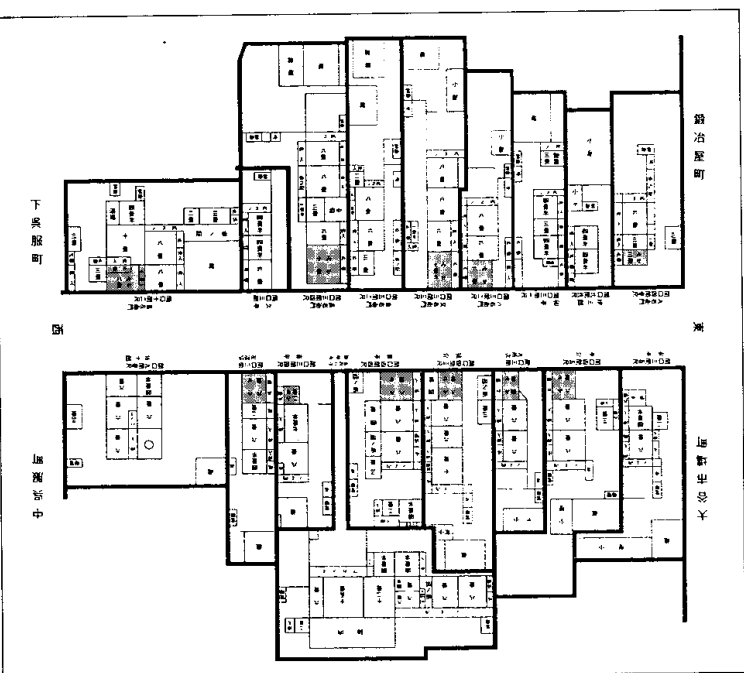
みせの間という空間には、それに合った商いの習慣や心意気が、時間をかけて熟成されてきたように思います。モノと一緒に、その店が持つ知識や最新の情報、商品への信頼や安心感、満足感が、やり取りされていたわけで、みせの間文化とも呼びたいくらいです。

町屋は、また、人が住む空間でもあり、みせの間から奥がプライベートスペースになった、店舗併用住宅です。短冊のように奥が深い敷地をうまく利用して、特色のある生活文化がありました。

家の奥には、品物を作ったり置いたりする工場や蔵だけでなく、狭い空間をうまく使って坪庭を設けたし、店主は茶を楽しみ、祭りを楽しむ文化人でもありました。

使い捨てへの反省が広がっていますが、今や修理して使うという社会システムは、ほとんど崩れてしまっています。こういうキメ細かいサービスが残っているのが、みせの間文化の流れをくむお店です。

高度成長以来の経済や商業の体系とは違った、日本的商いのマインドを持ったお店屋さん。そういうお店が、みせの間空間から、きっとよみがえる。そんな期待がふくらみます。



「長浜町絵図の世界」(長浜城歴史博物館より)

◀江戸時代後期に作成された切絵図。通りに面した部屋(●)に「みせ」の表示がある。

アメリカを魅せた 七人の子ども役者

普段の祭りと歌舞伎を見てもらう

昨年十月、長浜の子供歌舞伎役者が、初めて海を渡った。行き先はアメリカ合衆国。首都ワシントンと、滋賀県と友だち関係にあるミシガン州の州都ランシングで歌舞伎を演じたのだ。

アメリカでは、日本に対する関心が、いい意味でも悪い意味でも高まっている。ライシャワーやドナルド・キーンのような博士が、苦学して日本文化を研究した時代と違って、いまはアメリカの片田舎のおっさんでも、日本語をしゃべる人がいる。ワシントン公演では、子供たちの熱演に、大向こう、から声がかかったし、ミシガン州にも、歌舞伎愛好クラブがあった。

果たして、アメリカ人に歌舞伎がわかるのだろうか。出発前に感じていたそんな杞憂は、アメリカの空の彼方にふっ飛んでしまった。わたしたちが長い間、祭りのなかで楽しんでいた

きた子供歌舞伎を普段のとおり、ありのままにアメリカ人に見てもらおうのだ。

アメリカへ旅したのは、春の祭りで月宮殿の舞台に立った田町組の七人の子供たち。演ずる外題は「義経千本桜 吉野山道行の場」。もっともポピュラーな外題のひとつだ。ときは、壇ノ浦の戦いが終わったころ。源義経は、兄頼朝に追われて吉野へ逃れる。恋人の静御前が、家来の佐藤忠信をつれて、吉野山へ義経に逢いにやってくる。忠信が実は狐の化身というひねりはあるが、ストーリーはきわめて明快。戦いと恋を絡めた物語で、これなら世界共通のお話だ。

歌舞伎はアメリカの空気にびつたり

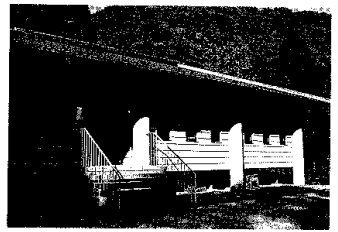
アメリカ公演が決まった当初、浮ついていた子供たちの顔つきが変わったのは、夏休みも最後のころ。

「わたしが、こんなに懸命にアメリカ公演を成功させようががんばっているのに、君た



伊香郡木之本町大音 TEL.82-4127
入館料 100円
実演見学は3,000円 (30名以下・31名以上は一人増につき100円UP)

賤ヶ岳のふもとで今も受け継がれる糸とりの作業につかう道具類を陳列。実演希望の方は、2、3日前までに予約を。実演料は、糸とりのおばあちゃんのお小遣いと生糸の代償というのも納得。



伊香郡西浅井町菅浦
連絡先 TEL.89-1121
(西浅井町役場・教育委員会)
開館時間 9:00~16:45 (変更あり)
入館料 大人 100円 小人 50円

青緑色の湖面を目の前に見る菅浦の里にある郷土史料館。鎌倉時代から明治初期までの村落や漁民生活のきまわりを書きこした資料などが展示されています。

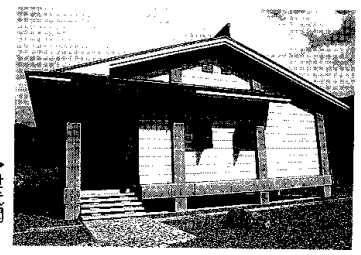


伊香郡西浅井町大浦
連絡先 TEL.89-1121
(西浅井町役場・教育委員会)
開館時間 毎週土・日曜日10:00~17:00
入館料 無料

昭和30年代まで、びわ湖輸送の主役であった丸子船に関する資料や、地域で使われていた農具、生活用具などを展示。民家を改装して平成4年にオープンした建物です。



己高閣
世代閣



伊香郡木之本町古橋 TEL.82-2784
開館時間
4月1日~11月30日 8:30~17:00
12月1日~3月31日 9:00~16:00
年中無休
入館料 500円 (2館分)
団体(20名以上) 450円

己高山一帯は、中世まで湖北随一の仏教文化圏が形成されたところ。己高山を仰ぐ地に建つ己高閣と世代閣には、鶏足寺に祀られていた重文の十一面観音菩薩像や、湖北最古の寺院という戸岩寺に祀られる仏像などのほか、お市の方にまつわる宝物や戦国時代の書状などが展示されています。

千年余の時を経て、明るい収蔵庫に安置される仏像群に向かい合い、交代でお世話にあたっておられる古橋の老人クラブの方たちからお話を聞いていると、肅々とした気持ちになります。



大浦ふるさと資料館